

論文

## 若年者の雇用問題と「やりたいこと」言説

橋 口 昌 治\*

### もくじ

はじめに

1 節 「やりたいこと」言説の射程

2 節 フリーターにおける「やりたいこと」言説の全体像

3 節 フリーターの「やりたいこと」言説の分析

4 節 「やりたいこと」言説の構造

おわりに

### はじめに

本稿では「やりたいこと」言説の分析を「フリーター」<sup>1</sup>の「やりたいこと」志向の先行研究の検討を通して行う。

本稿でいう「やりたいこと」言説とは、「やりたいこと」への言及一般ではなく、若年者雇用をめぐる語られる「やりたいこと」「好きなこと」「したいこと」などの総体に限定する。そこにはフリーターや大学生、研究者や就職情報誌などの語りが含まれている。

「やりたいこと」言説の構造とは、「やりたいこと」に主体化された若者のエネルギーや時間、就業行動が労働市場を通じて結果として雇用者に都合のいいように使われる構造になっていること、そして研究者の論文なども言説構造の一端を担っていることである。

フリーターの語る「やりたいこと」については先行する研究や論考があり参考になる<sup>2</sup>。それらは「やりたいこと」への強い志向はフリーター特有の意識であり、またそれは構造的・社会的な問題を個人化してしまうことを指摘している。本稿ではその指摘を参考にしつつも、そうした研究者の語りもまた言説空間の中でフリーターの非合理化<sup>3</sup>など別の意味合いを持ってくることを論じる。その原因として、すでに公表されているフリーターに関するデータや大学生や正社員に関する単純な事実をきちんと吟味できていないこと、特に大学生の「やりたいこと」言説が視野に入っていないことが挙げられる。

溝上 [2004] が『『やりたいこと』や『将来の目標』を基準として人生形成をはかろうとする現代大学生の生き方について』分析しているように、大学生においても「やりたいこと」に対する強い志向は見られる。特に就職活動においては企業からエントリーシート<sup>4</sup>や面接で「(入社後や、将来において)やりたいことは何か」を必ずといっていいほど聴かれるため、就職情報誌などでは多くの「やりたいこと」言説が生産されている。しかし若年者雇用問題の中心的なテーマがフリーターであるため、大学生における「やりたいこと」言説は雇用問題との絡みで論じられることがなく、また大学生とフリーターの「やりたいこと」言説が同時に論じられることもなかった。

本稿では、まず他の議論との関連で「やりたいこと」言説の位置づけを行う。次にフリーターの「やりたいこと」志向に関する先行研究において何が語られていて、何が語られていないかに注目し、その分析を行うことで「やりたいこと」言説の構造を提示したい。

---

キーワード：若年者雇用問題、フリーター、大学生、「やりたいこと」志向、言説

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2003年度入学 公共領域

## 1節 「やりたいこと」言説の射程

「やりたいこと」言説は、主に3つの大きなテーマが重なる領域として捉えられなければならない。1つは2000年前後から日本でも盛んに論じられるようになった若年者雇用問題であり、その議論において「やりたいこと」言説は量産されている。本稿ではこのテーマに焦点を当てて論じるが、その背景には2つの大きなテーマがある。その一方は近代化の生み出した「青年」という主体の問題であり、他方は1970年代から現れ始める「新自由主義」の生み出す主体の問題である。逆に、若年者雇用問題における「やりたいこと」言説とは、この2つの主体をめぐる問題であるとも言える。

青年期とは、身体的には成人であるが経済的には児童である状態だと言え、児童を早い時期から大人社会へと組み込んでいく社会には見られない期間である。青年期を作り、階級性を伴いながらも一般化させたのは、近代化であり近代学校制度である。「大量分業社会」<sup>5</sup>である近代の産業社会は、多様かつ大量の役割を社会にもたらす一方で、社会関係を画一化していく。そうした産業社会の一員になるために、児童と青年は実社会から隔離され、長い学習期間を持つようになった。それが学校であり、学校教育を受ける期間が長いほど青年期も長くなる。栗原[1981]は、青年に拡大再生産に適応し得る「自主的・自発的」な自己開発能力を備えさせる制度として学校があり、また大人社会の語る「成熟」が実際は「順応」にすりかえられている、と指摘している。

近代化と青年の出現は日本でも起こり、学校教育の影響を受けた者は「青年期」についての様々な言説に触れ、そこで示される生き方のモデルに従って身を処すようになっていく。そうした「青年期」の言説として主要な位置を占めたのが青年心理学や教育学、または青年文学であり、その中で語られた「人格」や「自己実現」「理想」であった。北村[1998]は、「青年期」言説に触れて青年として主体化された者は近代的システムへの適応力を高め、表象を媒介とする知が他のあり方の「知」を圧倒するような「表象機械」となると論じている。そして表象機械としての精神は、自己を規律化して根源的な欲求としての「したいこと」を抑制したのち、外部から与えられた思考の産物である「理想」(すべきこと)を「自発的に」発見した上で「欲求」(したいこと)へと転化し、より高次のあるべき自己を実現しようと青年を動機付けるのだという。そうした近代的主体が形成される過程とは近代国家を支える国民の形成過程そのものであり、社会や国家から要請された「理想」を「自発的に」受け入れていく主体の形成期として青年期は捉えることができる。ただ北村が述べるには、近代的な青年という枠組みは大正期以降の都市化のなかで揺らぎ始め<sup>6</sup>、そうした揺らぎは「戦後」の高度成長期以降により複雑な形で浮上してきているという。

この点との関連は現時点で論じることができないが、もう1つの大きなテーマである「新自由主義」は世界的な高度成長以後に現れたイデオロギーである。出現した時期については諸説あるが、推進した代表的な政治家としてイギリスのマーガレット・サッチャーとアメリカのロナルド・レーガンが挙げられ、政策の特徴は「自立した個人」「小さい政府」「強い国家」などにまとめられる。日本における「新自由主義的改革」の開始についても諸説あるが、中曽根康弘による行革路線、90年代半ばの日本的経営の転換、小泉・構造改革などいくつかの段階を経て「改革」は進められている。

その「新自由主義」の生み出す主体を渋谷・酒井[2000]は「起業家的個人」だとまとめ、そこで「重要なのは、企業に従属するのではなく、自らが一個の独立した企業になること、そして企業のように振る舞うこと」だと述べている。その「起業家的個人」は労働ではなく自己の起業活動を通じた自己実現を行う主体であり、積極的にリスクを引き受け、自己の才能や能力を啓発する経済的かつ倫理的な主体だという。逆にそうした主体化を拒むものはモラルに反すると排除される。その結果、「一方の極で資本に要請されるまま、自己の生をくまなく開発し、絶え間ない生活の再編に対して自己の身体、精神、感情をフレキシブルに適應させ続けることを定めとする階級が存在し、他方の極で貧困のうちに排除され、恐怖を喚起させる見せしめとしてしか使い道のない『アンダークラス』が存在する」となると渋谷[2003]は論じる。

そして「やりたいこと」言説は、近代以降の「青年」と「新自由主義」の生み出す主体とが交わる問題であると位置づけられる。つまり進路指導や就職活動などを通して外部から与えられた「すべきこと」を「自発的に」発見した上で「やりたいこと」へと転化して自己実現するように動機付けられながら、規制緩和が進み厳しくなる一方の労働市場と労働現場を生きる「経済的かつ倫理的な主体」の問題として「やりたいこと」言説は捉えられるので

ある。

## 2節 フリーターにおける「やりたいこと」言説の全体像

フリーターという言葉は、1980年代後半にリクルートの求人雑誌『フロムエー』（1982年創刊）によって造られ、広められたといわれている<sup>7</sup>。そのときの定義はフリーアルバイト＝学校を卒業した後も、自分の生活を楽しむために定職に就かず、アルバイト生活を送る若者達であった。またこの言葉を創った道下裕史によると「まじめに夢に向かってチャレンジしている若者への応援メッセージとして、彼らに送った称号」だったという（道下 [2001], pp.79-80）。つまりフリーターという言葉は創られた時点から、単に就業形態だけではなく「やりたいことをやっている若者」「いつまでも夢を追う若者」というライフスタイルを示しており、また多くのフリーターもそうした立場を自称してきたのである。そしてそのライフスタイルが「大人になりたがらない無責任な若者たちである」と否定的に語られるか<sup>8</sup>、「新しい組織観・労働観である」と肯定的に受け止められるか<sup>9</sup>が、フリーターの論じられ方の主なパターンであった。

そうした状況の中で、90年代末に日本労働研究機構がフリーターについての実証的な分析の必要性を感じて行った調査の報告書が日本労働研究機構 [2000] である。日本労働研究機構 [2000] はフリーターの定義が曖昧なまま使われている実態を受け、フリーターを自称する人をフリーターと定義し「自称」フリーターのインタビューを行っている。そして下村 [2000] がインタビューの中でフリーターが「やりたいこと」という言葉を頻繁に使い、またこだわっていることを指摘し分析を行ったのが、フリーターの語る「やりたいこと」が研究対象となった最初の例である。その後、日本労働研究機構 [2000] の他に学研 [2001]、フリーター研究会 [2001] など、フリーターの声を集め、それに上野 [2001] などの分析を載せたものや、久木元 [2003] のように下村 [2000]、[2002] とは違うアプローチを試みるものなど、研究者による「やりたいこと」への分析、言及が多く出された。

そうした「やりたいこと」についての論考全体をみたととき、フリーターの発生原因が労働市場の変動などの構造的な要因にあること、「やりたいこと」など意識が問題視されることでフリーターの個人的な責任ばかりを問うようになることを警戒していることが共有されている。この点は、若者の就業行動の変化を若者の意識にだけ還元することはできないので評価できる。

一方、論考の多くはすでに公表されているフリーターに関するデータや大学生や正社員に関する単純な事実などから明らかに論駁できるものも少なくない。その原因はいくつか考えられるが、結果としてフリーターを「やりたいこと」にこだわる非合理的な存在として扱うようになってしまう可能性を持っているので、その点を批判的に指摘しておきたい。

以下、詳細に論じていく。

フリーターにおける「やりたいこと」言説を分析するために検討した論文や著作は以下の通りである。

インタビューなどを通してフリーターの声を集めたものとして以下がある。

- ・日本労働研究機構『フリーターの意識と実態 97人へのヒアリング結果より』2000
- ・学研『フリーター なぜ？ どうする？ フリーター200万人時代がやってきた』学研、2001
- ・フリーター研究会『フリーターでいいの？ フリーターがいいの？ フリーターがわかる本』数研出版、2001

フリーターの語る「やりたいこと」を論じたものとして以下がある。

- ・上野千鶴子「「フリーター」の背後にあるもの」2001
- ・小杉礼子「フリーターからの「はじめの一步」」2001
- ・長須正明「フリーターという生き方 若者たちが描くライフスタイル」2001
- ・乾彰夫「職業教育・進路指導の充実は「フリーター問題」を解決できるか」2002
- ・下村英雄「フリーターの職業意識とその形成過程 「やりたいこと」志向の虚実」2002

- ・山田昌弘「フリーターの置かれている現状と将来展望」2002
- ・苅谷剛彦「若者よ、丁稚奉公から始めよう 「自分探し」を夢想する前にまず「手に職」をつけよ」2003
- ・久木元真吾「「やりたいこと」という論理 フリーターの語りとその意図せざる帰結」2003

### 3節 フリーターの「やりたいこと」言説の分析

フリーターへの調査の中で頻出した「やりたいこと」という言葉とその背後にある意識を分析しようとしたのが、上に記したいいくつかの論考である。ほとんどの論者がフリーター問題を若者の意識だけに還元せず、構造的に捉えるべきだと考えているため、その多くはフリーターの置かれている状況が「やりたいこと」への言及を生んでいる、というアプローチをとっている。しかしそのアプローチは多様である。その多様なアプローチを「やりたいこと」に言及させる要因によって分類し、順に説明していく<sup>10</sup>。

#### 「脱近代・脱学校」グループ

脱近代的・脱学校的な価値観と「やりたいこと」への言及を関連付けて分析 …上野

#### 「困難」グループ

労働市場における困難な状況が「やりたいこと」について語らせたりこだわらせたりすると分析 …下村、久木元

#### 「ごまかし」グループ

現状へのごまかしとして「やりたいこと」に言及していると分析 …小杉、長須、山田

#### 「進路指導」グループ

学校による進路指導の影響を重視して分析 …苅谷、乾

#### 脱近代・脱学校グループ

脱近代的・脱学校的な価値観と「やりたいこと」への言及を関連付けて論じている。ここには文章の中に「脱近代」という言葉を使っている上野が入るが、長須も近い発想を持っている<sup>11</sup>。

#### 【上野】

上野は、近代的で学校的、そして中産階級的な価値観である「後払いの法則」がフリーターには通用しなくなっており、フリーターという「何でも入るブラックボックス」(p.195)にフリーター自身が込めているメッセージは「お金は欲しい、でも今のような働き方はしたくない」だけであるという。そうした「今」重視の現在主義的なフリーターに将来への投資、「生産を通じた自己実現」などという発想はなく、それゆえ「夢追求型」の「やりたいこと」を言葉通りに信用しない方がいいと述べている。

上野の評価できる点は、フリーターの背景にある階層要因・ジェンダー要因を指摘している点と、欧米諸国との比較や近代化・脱近代といった広い視点からフリーターを論じていることであろう。こうした視点は1節で指摘した近代的青年の系譜上に「やりたいこと」言説を位置づける本稿の問題意識と重なるところがある。しかし同じ学研[2001]に文章を寄せていた長須[2001]と同様に上野のフリーター像には問題がある。それはインタビュー例に出てくる実際のフリーターと上野の語るフリーター像との間にギャップがあることである。インタビュー例に出てくるフリーターは多様であり、上野の言うフリーター像に当てはまるものもあるし、そうでないものもある。それをなぜ上野は1つのフリーター像を作り出し、実際のフリーターの言葉を切り捨ててしまうのか、理解に苦しむ<sup>12</sup>。

また上野の関心は、フリーターの中に「新しい価値や行動様式」「新しい脱近代的な価値」があるかどうかにあるという。確かにフリーターに「何か新しいもの」を読み取り、新しい時代への可能性なるものを展望してみたいという気持ちも分かる。しかし下村らが指摘するように「やりたいこと」志向はフリーターの中に広く見られ<sup>13</sup>、フリーターをもって単純に「脱近代的な価値の登場」を議論することはできないと考えられる。

### 「困難」グループ

「困難」グループは日本労働研究機構 [2000] をもとにフリーターの「やりたいこと」志向の存在を確認し、それを前提に分析や議論をしている点で上野とは異なる。また現時点での実証的なフリーター研究の成果もあり、他の論者もフリーターにはある程度「やりたいこと」志向が見られることを前提に議論を進めている。

「困難」グループの議論の特徴は労働市場における困難な状況を「やりたいこと」への言及の主な原因としている点である。しかし下村と久木元ではそれぞれ分析している困難な状況が異なる。下村は就職も進学も困難でフリーターとなっていく高校生の状況、久木元は正社員になれるとしても正社員の雇用環境の厳しさを知っているフリーターの状況である。しかしいずれも客観的に厳しい条件が先行してあり、その中で若者が積極的に選択しようとするとき、あるいは選択したときに出てくる言葉が「やりたいこと」だという点で共通している。

### 【下村】

下村 [2000] はフリーターに見られる「やりたいこと」志向を体系的に分析した最初の例だと言っている。下村は日本労働研究機構 [2000] においてフリーターの職業意識の分析を受け持ち、「“ やりたいことをやる ” という価値観を中心とした職業意識」を指摘している（下村 [2000]）<sup>14</sup>。下村 [2000] にはフリーターの「やりたいこと」に込められている組織観が触れられており、これはフリーターの正社員観を取り出したものといえ興味深い<sup>15</sup>。また下村 [2002] でもフリーターなりの合理性を指摘している<sup>16</sup>。

後述するように、フリーターの正社員観・合理性をどう見るかは重要である。フリーターなりの合理性を取り出した点は、下村が丹念にフリーターの個々の言葉に当たって分析した結果であり、評価できる。しかし、職業心理学、進路指導論という方法論ゆえかもしれないが、「やりたいこと」という主観性の強調を生み出す客観的な条件の抽出に成功している一方で、結局その客観的条件に対する対処方法を提示することなく、「メッセージを送る」（p.98）など主観に訴える手法しか提示できていない。

### 【久木元】

久木元 [2003] のユニークな点は、フリーター増加に関する先行研究に共有されていたポイントを「意識」の変化 例えば、仕事を続けることへのこだわりが希薄になった、など にすべて還元することへの警戒」（p.74）とまとめた上で、その警戒を共有しながらもフリーターの言説の展開と帰結に注目して分析を行った点である。久木元の評価できる点は、まず正社員との関係でフリーターの困難さを分析したことである。その分析の成否はともかく、フリーターが正社員へと移行しない理由をフリーターにのみ注目して分析する論者が多い中、「実は正社員も非常に厳しい状況におかれていて、しかもそれをフリーターは知っている」ということを指摘することは重要である。次に、「仕事」や「働く」ということをめぐる語彙の問題を、フリーターだけではなくフリーター以外の人々にも共有される日本社会の問題として指摘したことである。言説に焦点を当てると意識や心構えの話になりがちであるが<sup>17</sup>、構造的な分析を踏まえた上での言説分析であることによって久木元は社会における語彙の問題を指摘できたのだらう。

批判すべき点は、久木元が論理の自己展開にこだわりすぎている点である。例えば「やりたいこと」がフリーターの価値基準になっているため「やりたいこと」から降りにくくなっているという分析をしている。しかし「やりたいこと」志向が強いとされる「芸能志向型」のほとんどが見切り上限を明言し、また「既に見切り」も存在していることから<sup>18</sup>、フリーターが「やりたいこと」の袋小路に陥っているという指摘は妥当ではない。そして「「やりたいこと」を、最初からできあがったものとして自分の内部に存在しているはずだと設定」（p.82）しているために「やりたいこと」探しが誰にも止められなくなる、と述べているが、フリーターがアルバイトなどの経験や他人の話から何も影響を受けていないわけではない<sup>19</sup>。実際、フリーター期間に労働観や職業観の変化が見られたという報告もある<sup>20</sup>。このように3つの「意図せざる帰結」について久木元がきちんと論証できているとは言えない。

久木元のフリーターの困難さを抽出しようとする努力は評価できるが、論理の自己展開を強調するあまり、結果としてフリーターの頑迷さ・非合理性を強調することになっていないだろうか。久木元論文を読んでいるとフリーターが「非合理的な夢見る愚か者」のように思えてくるが、これはインタビューなどに答えているフリーターと必

ずしも一致しない。フリーターにも頑迷で非合理的な人はいるだろう。しかし久木元論文では一人一人の言説をバラバラにした上で分析を行っているためか、個々人の合理性も非合理性もうまく取り出せず、フリーター全体が「やりたいこと」の「意図せざる帰結」に落ち込んでいるかのような結論になってしまっている<sup>21</sup>。

#### 「ごまかし」グループ

「ごまかし」グループに共通しているのは、「やりたいこと」を持っていることが肯定される価値観が社会にあるため、「やりたいこと」に言及するフリーターが多い、という点である。「困難」グループに似ている点もあるが、「困難」グループが分析に重点を置いているのに対して、「ごまかし」グループは「やりたいこと」志向についての書き手の価値判断を明示的に行っている点異なる。

#### 【小杉】

小杉は日本労働研究機構によるフリーター研究の中心として、フリーターの実態や意識の調査・分析を行ってきた。それは主に小杉 [2002] [2003] にまとめられている。ここで検討する小杉 [2001] でもフリーター研究の成果、主にフリーター現象を含む若者の就業意識と行動の変化と労働市場の変動の関係がベースとなっている。小杉が中心となって解明されたフリーターの構造的要因には依拠すべき点が多々ある。ただし小杉 [2001] では、フリーターの見ている職業世界は一部であり、またフリーターの観察は未熟なものであると考えているようにも受け取れ、「事態を網羅的に把握できている分析者 = 小杉 / 事態を個別にしか把握できていない当事者 = フリーター」という視線を感じる。フリーターにとって経験を経た上で得た職業観は現実そのものだといえるのだが、そうした小杉の視線とフリーターの視線のギャップは、インタビューから把握できるフリーターの正社員観と小杉の考えるフリーターの正社員観の違いからも伺える。

小杉は正社員になれなかったものがフリーターの一部になっていることは指摘するものの、正社員の労働環境については触れず、正社員になることが経済的に自立した大人になることだと主張する。そして「やりたいこと」が明確ではなく将来への道筋が見えていないフリーターを問題化する。

しかし小杉のいう「大人の職業社会の事実」とはどのようなものであろうか。乾 [1997] が指摘しているように日本経営者団体連盟 [1995] のいう「長期蓄積能力活用型グループ」は新卒採用された大卒でもなるのが厳しい。つまり職業訓練を受けたとしても一旦新卒採用市場から離れたフリーターが企業の中核的な社員になることは不可能に近いのである。そして玄田 [2003] 熊沢・立岩 [2003] にあるように多くの正社員の労働条件は厳しく、また佐々木 [2004] が指摘するように雇用形態においてフリーターとの境界は曖昧である。そして日本労働研究機構 [2000] 学研 [2001] などに目を通すと、フリーター自身、正社員を経験したり、正社員と共に働いたりした結果、正社員の困難さを知っていることが読み取れる。下村 [2002] によると、フリーターの語りの中で、正社員の「安定」というメリットが「拘束」という言葉で相殺されているという。正社員の労働実態を考慮に入れたとき、こうしたフリーターの語る「拘束」を「自己中心的な甘え」「未成熟な職業観」だと論じることができるだろうか。

確かに「やりたいこと」や「夢」を語るフリーターの全てがその目標に向かって努力しているとは限らないし、非現実的な「夢」を語っている場合もあるだろう。しかし問題にすべきは小杉から見たフリーターの非合理的な側面ではなく、フリーターの個々の経験や現実の中から出てきた合理的な言葉や態度、決定が、小杉の合理性から見た場合に非合理に映るといいうギャップが、なぜ生まれるか、であろう<sup>22</sup>。それにフリーターの「やりたいこと」は派手なものもあるが、ささやかなものも多い。小杉はフリーターの構造的な把握にはある程度成功しているが、フリーターの語る「やりたいこと」に込められているフリーターにとっての合理性をつかみ損ねていると言える。

#### 【長須】

長須 [2001] は、フリーターの構造的な問題を基本的に抑えられているし、短い文章でフリーターの問題を理解できるようになっている。しかしそのフリーター観には問題点があるように思われる。

若者文化のリーダーとも言えるフリーターは「夢」を語る。「夢」を持つこと自体に価値を見出し、「夢」を持

ち続けることはカッコイイことであると考えているように見える。そのため無理に「夢」をつくり、語るが、そのために何かしているかという、何もしていない。というより、本当は何も考えていない。(長須 [2001], p.220)

しかし、長須の文章が掲載された学研 [2001] に載っているフリーターのインタビューを読めば、決して何もしていないこともなく何も考えていないこともないことが分かる<sup>23</sup>。長須がそこには載っていない他のフリーターに調査した上で上記のようなことを書いているのだとしたら、長須は文章を掲載すべきではなかったのではないかと、思えるほど、インタビュー例と長須のフリーター観はかけ離れている。

また長須は『『やりたいこと』より『できること』から考える生き方』あるいは「無名の人生への助走期間」と題した箇所、フリーターに諦めの薦めを説いている。その人生論にはうなずける部分もある。しかし一方で、雑誌やテレビなどで「やりたいこと」をやるのが素晴らしいと喧伝され<sup>24</sup>、また大学生では有利な就職を決めるために「やりたいこと」探しが必要とされている<sup>25</sup>。高校においても個性を重視した進路指導が盛んである。しかもこうした動きは社会全体で進められているとの指摘もあり<sup>26</sup>、もし「やりたいこと」への批判を行うのであれば、フリーターではなく社会に向かって行くべきである。長須自身が指摘しているように、フリーターは同世代の大学生や会社員と同様そうした「やりたいこと」言説の影響を受けている。そうしたなかでフリーターにだけ諦めの薦めが説かれているのである。

#### 【山田】

山田 [2002] は前述したように、発想が「困難」グループに近く、実際、フリーターの置かれている困難な状況を的確につかんでいる<sup>27</sup>。つまりグローバル化やIT革命などがフリーターのような不安定な雇用形態を大量に作り出しているのであり、企業はそうした雇用者に対して職業能力を開発するようなコストをかけることはしない。そのため大企業正社員などは将来の生活設計を描けるが、不安定雇用従事者は描けない。フリーターは就きたい仕事と現在の仕事に大きなギャップを感じながら、しかも将来設計も立てられないという困難な状況にある。そうした困難な状況を「プライドを満足させながら」(p.17 (89)) 受け入れさせるシステムがフリーターであり、山田はフリーターのことを「夢見る使い捨て労働力」と定義する。そしてそれを支えるのが家族からの経済支援と「好きな仕事をするのが幸せ」という言説であるという。

前半の構造変動、しかもグローバルな構造変動がフリーターの困難な状況を作り出しているという指摘は正しい。しかし後半のフリーターを「夢見る使い捨て労働力」と言い切る部分は批判すべきだろう。

まず山田は以上のようにフリーターの「夢」を語っているが、フリーターの「夢」の内容について大きく誤解していると言える。

フリーターの若者は、将来はカメラマンや大学教授、レストランのソムリエなどの専門職や大きな企業の正社員、公務員に就きたい、もしくはそのような男性の妻になりたいと思っている。(山田 [2002], p17 (89))

山田にとってフリーターの「夢」は過大で非現実的なものであり、それは現実を見ないようにするためのものではない、それゆえ具体的に「夢」に向かって努力はしていない、と考えているようである<sup>28</sup>。しかし日本労働研究機構 [2000]、学研 [2001] など手持ちのフリーターのインタビューを読む限り、現実的な目標に向かって努力しているフリーターは多い。またそうした資料からは、現実の厳しさを知らないわけではなく、むしろ厳しい現実を知りながら日々過ごしているフリーターの姿が浮かび上がる。

またある意味では「夢見る使い捨て労働力」はフリーターだけではない。大学生も就職活動のときは「やりたいこと」など「夢」を語られるのである。しかし就職し正社員になれたとしても希望通りの部署に就ける保障はなく、またこれまで指摘してきたような不安定で過酷な労働条件が待っている。確かにフリーターよりは能力開発や付加給付などの点で企業から優遇されているかもしれない。しかしその多くは若いうちにしか耐えられないような労働環境にいるのであり、フリーターと正社員、非正規雇用と正規雇用の違いは考えられているより曖昧である<sup>29</sup>。

ただフリーターが「やりたいこと」をやっていたり探していたりする間、企業にとって都合のよい「若年単純使い捨て労働者」が供給され続けるという構造を指摘しており、この点は興味深いし、重要である。それは後で検討する苅谷 [2001] などが指摘するような、「やりたいこと」という言葉を語ることによって、就業選択の問題が個人化されるという点とは別の問題を指摘しているからである。それは「やりたいこと」を語ることにより若者が、労働市場において結果として企業の都合のいい動きをしてしまうという問題である。

若者たちは「やりたいこと」をやった方がいいという社会的な価値観にも影響され「やりたいこと」について語ったり語らされたりするが、その「やりたいこと」というのは山田のように非現実的な「夢」ではないし、またフリーターが現実から目を背け「夢」の世界に逃げ込んでいるというわけでもない。つまり問題にすべきなのは、「やりたいこと」が生み出す若者のエネルギーや時間が労働市場を通じて結果として企業の都合のよいように使われる構造である。

#### 「進路指導」グループ

「進路指導」グループの分析の特徴は、「やりたいこと」志向の原因の分析において進路指導の影響を重視し、しかも批判的に分析していることである。乾・苅谷両者の批判は、生徒の個性を重視し職業意識の明確化させようとする進路指導が、労働市場の構造的な変動の結果起きているフリーター現象の原因を個人化してしまう可能性があるという点で共通している。

#### 【乾】

これまでの論者に共通しているように、乾もフリーター現象の原因は労働市場の構造的な変動であると認識している。その上で、文部科学省によって発表された「高校生の就職問題に関する検討会議報告」(2001年2月)で高卒無業・フリーター問題の対応策として「キャリア教育の推進」「インターシップ等の推進」が提起されていることに対して、高校普通科に職業教育が広がることは歓迎しつつも違和感を訴える。その理由は、構造的な問題の原因を「若者たちの意識変化」に求めているからである。こうした問題意識は他の論者にも共有されていることだろう。乾のユニークな点は、「高校生の就職問題に関する検討会議報告」の中で進路決定場面での若者たちの意識をめぐる具体的問題への記述の部分について「ほとんど支離滅裂といっている」と述べて行った指摘にある。

「どんな仕事に就きたいか」の希望をもっていないことが「未成熟」として責められる一方で、「どんな仕事に就きたいか」明確な希望をもってこだわることが同じく「未成熟」として責められている。(乾 [2002], p.20 (92))

また職業意識の明確化を求める教育を批判する乾の指摘は、「やりたいこと」を持ってという圧力があること、その中で若者がある種ダブル・バインド的な状況に置かれていること、そして矛盾した状況に置かれているのは若者の方であるのに言説のヘゲモニーの関係から非合理化されているのは若者の方であることの3点にまとめられる。

「やりたいこと」言説におけるフリーターの非合理化ということについては何度か触れてきた。乾は他の論者と比べて、そのことに対して意識的である。しかしこうした問題意識と乾が若年者雇用問題対策の参考にしているブレア政権の「ニューディール」は両立するのだろうか。伊藤 [2003] の指摘によると、「ニューディール」は参加を拒むものに対して罰則を設けることにより参加を実質強制し、また求職活動を義務付けているため労働供給を増大させ、イギリスの労働市場は逼迫しているのにも関わらず賃金上昇が見られないという。また苅谷 [2003] はブレア政権のもとで「コミュニティ」が再構築される一方、そうした「コミュニティ」の名のもとに、「求職活動」や「職業訓練」を行わない者が「モラルを欠いた者」として扱われるようになることを論じている<sup>30</sup>。それゆえ「ニューディール」を参考にした政策では、若年者をやりがいのない安価な仕事に追いやり、またそれを拒む者を「モラルを欠いた者」として扱うことになることが予想される。つまり結局はフリーターを含めた若年者の非合理化という帰結を生み出してしまうのであり、乾のフリーターの非合理化に対する問題意識はブレア政権の「ニューディール」とは相容れないのだが、そのことは意識されていない<sup>31</sup>。

## 【苅谷】

苅谷 [2003] もまた、高校の進路指導で「自己理解」にもとづく「自分のやりたいこと」「自分に向けた職業＝適職」探しがさかんに奨励されていると指摘し、それを批判した。苅谷によると個性重視の進路指導が、きつい仕事を避ける「自分探し」をしているつもり若者を生み出し、また彼らの決定を「主体的な決定」として容認せざるを得ないような状況を作り出しているという。そして元来、階級的に限られた概念であったマスローの「自己実現」概念が大衆教育社会において一般化し、「自分らしさの追求」や自己実現という欲求は強化される一方で、それを達成する手段が社会に十分提供されていない状態が、「自己実現アノミー」ともいえる状況を生み出したとしている。それに対し、高卒無業者に対して現実的に手に職をつけるために自己実現欲求を抑えて職業訓練に励むように言い、彼らが身につけたい技能を身につけられるように「キャリア支援ファンド」の創設を提案する。

フリーターの抱える構造的な困難さを知れば知るほど、「やりたいこと」や「自分探し」にこだわることなく現実的に手に職をつけた方がいい、「やりたいことよりもできることを」という結論は妥当のように思われ、苅谷の議論は説得的であるように思われる<sup>32</sup>。

しかし長須のところでも触れたように、大学生の就職活動において「やりたいこと」探しは必須とも言える状況にある。つまり現在の若年労働者市場においてより有利な位置を得るために必要なものなのであり、フリーターにだけ「やりたいこと」探しを諦めるように勧めることはフリーターにとってはダブルスタンダードなのである。

確かに苅谷の提示する「自己実現アノミー」という概念は参考になる。しかしその原因を「大衆教育社会」における進路指導にばかり帰してはフリーターや大学生が直面している「やりたいこと」という言葉の問題性は解けないであろう<sup>33</sup>。その結果、「キャリア支援ファンド」のような「現実的」で有効だと思われる政策提案も「やりたいこと」言説の中では別の意味を持つてくるのである。

例えば(社)部落解放・人権研究所編 [2005] には、フリーターが「やりたいこと」より「安定」を重視しても、そういう仕事は「資格の有無や学歴の多寡、そしてその職種の経験が重視される」ため職に就けないという、新規卒市場から離れたフリーターのジレンマが描かれている<sup>34</sup>。確かにこうしたフリーターに学校から離れた若者に対する奨学金のような意味で「キャリア支援ファンド」が用意される必要はあるかもしれない。しかし一方で「できること」への道が政策的・制度的に用意されることで、個々人の合理性によって「できること」への道に乗ってこない若者が非合理化される可能性は否定できない。つまり「それでも『やりたいこと』にこだわる者」として非合理化されるのではないかということである。

#### 4節 「やりたいこと」言説の構造

前述したように「やりたいこと」言説の構造とは、「やりたいこと」に主体化された若者のエネルギーや時間、就業行動が労働市場を通じて結果として雇用者に都合のいいように使われる構造になっていること、そして研究者の論文などもそうした言説構造の一端を担っていることである。

具体的に述べると、まず「やりたいこと」という言葉は「やりたいこと」を仕事において実現している若者のエネルギーを引き出し、また長時間労働など厳しい労働環境によって生じる問題を個人化させることができる。次に、「やりたいこと」よりも「できることを」「手に職を」という語りは一見説得的に見えるが、大学生や正社員の状況を考慮に入れた場合、階層化の追認とフリーターの非合理化という機能を果たしていることがわかる。以下、2節の整理を踏まえて「やりたいこと」言説の構造について論じていく。

1節で述べたように「やりたいこと」言説は近代以降の「青年」と新自由主義の生み出す主体の系譜上に位置する問題であると考えられるのであり、その点で近代という大きな視点をもってフリーターの「やりたいこと」志向を分析した「脱近代」グループは評価できる。しかし本稿では、外部から与えられた「すべきこと」を「自発的に」発見した上で「やりたいこと」へと転化して自己実現するように動機付けられる近代的青年の延長上に「やりたいこと」言説を捉えているため、フリーターを脱近代的主体であると捉える上野の議論に与することはできない。実際、下村などは実証的にフリーターの「やりたいこと」志向を確認しており、また溝上は「やりたいこと」を基準に人生形成を図ろうとする大学生について分析しているように、「やりたいこと」言説は上野が考えているよりも大

きな拡がりを持っていると考えられる。こうした拡がりを捉えずにフリーターを「新しい脱近代的価値」の具現者として表象しても、80年代のフリーター礼賛的な議論を再現するだけに終わる可能性がある。

ではフリーターに「やりたいこと」志向があることを前提になされた「困難」「ごまかし」「進路指導」の各グループの議論は「やりたいこと」言説の構造の中でどのような位置を占めているのだろうか。

「困難」グループの議論の特徴は、フリーターの「やりたいこと」志向に対して明示的に価値付けを行うことはなるべく避け、フリーターの語る「やりたいこと」に内在してその原因を探っている点である。しかし、下村は「やりたいこと」志向の客観的な原因とフリーターなりの合理性を指摘しつつも問題の解決のために働きかける対象をフリーターの主観にしか見出せていない。一方、久木元の方はフリーターの困難さを論理的に抽出しようとするあまりその頑迷さ・不合理さを強調してしまう結果になっている。つまり両者の議論は、明示的ではないが結果として、「フリーターは問題であり、その問題の解決のために変わらなければならないのもフリーターである」という論理に飲み込まれかねない可能性を持っている。

次の「ごまかし」グループは、フリーターの「やりたいこと」志向は「ごまかし」であるという価値判断を明示的に行っているのが特徴である。そしてその「ごまかし」が可能になる原因を、「やりたいこと」をやっていたり探していたりすることが肯定的に捉えられる社会に求めている。しかし「やりたいこと」に対する姿勢は若干異なる。確かに「やりたいこと」、自分が望むことができている状態は一般的に好ましく否定しがたい。このため小杉は、「将来の自分」に結びつく「やりたいこと」は構わないという考えを表明している。しかし山田[2002]のように構造的な視点を取り入れた場合、事態はそう単純ではないことがわかる。つまり実際に「やりたいこと」ができていのか否か、分かっているか否かに関わらず企業は安価な労働力を手に入れることができ、また規制緩和などによって構造的に進む若年者の雇用状況の悪化を個人の問題にすることができるのである。

こうした「ごまかし」グループの議論を検討する上で、大卒新入社員における「やりたいこと」言説を分析することは重要である。例えば「職場の人権」[2004]<sup>35</sup>には、「やりたいこと」を仕事で実現できながらも労働条件によっていずれば職場を離れないといけなく考えている大卒新入社員の姿がある<sup>36</sup>。彼ら/彼女らは「やりたいこと」に動機付けられ膨大なエネルギーをもって仕事に打ち込む一方で、厳しい労働条件を「やりたいこと」「楽しむ」という言葉を使って個人の問題として引き受けようとしている<sup>37</sup>。多くのフリーター研究者はフリーターが正社員となることによって問題が解決すると考えているが、正社員でしかも「やりたいこと」を仕事にしていると考えている人たちでさえ、労働時間などの労働条件において「客観的に」問題があるのである。またそうした問題を「主観的には」問題ではないと考えるように主体化しているのが「やりたいこと」という言葉なのだと考えられる。

このことは2つのことを意味している。まず「やりたいこと」のある種の「ごまかし」の作用は、フリーターだけでなく少なくとも大卒新入社員にも当てはまりそうだということである。このことは「やりたいこと」言説の拡がりを意味するとともに、その中で「なぜフリーターの語る『やりたいこと』だけが問題にされるのか」という疑問を生じさせる。この疑問に対する1つの回答として「正社員よりもフリーターの方が客観的に厳しい状況にあるので、『やりたいこと』探しなど悠長なことを言っている余裕はないからである」といったものが考えられる。こうした考えは「ごまかし」グループの長須のいう「やりたいことよりもできることを」という論理に通じる。しかしそうした論理の多くは大学生や正社員における「やりたいこと」言説を考慮に入れていないため、フリーターにだけやりたいことへの諦めを説くという形になっており、実質的には「階層化」の肯定に繋がっている<sup>38</sup>。

2つ目の意味は、「フリーターを正社員にすることが若年者雇用問題の解決である」という発想にもとづいた政策は必ずしも適切ではないということである。なぜなら、玄田[2003] 熊沢・立岩[2003]などが指摘するように正社員の労働条件もまた過酷だからである。しかもフリーターは自身の経験や職場での経験から自分たちがなる可能性の高い正社員の働き方を知っていて、その結果、個々人にとって合理的な就業行動をとっている可能性は高い。しかしそうしたフリーターなりの合理性は「未熟な就業観」として扱われ非合理化され、矯正の対象にすらなっている。

「進路指導」グループの議論は、こうしたフリーターの合理性と若年者雇用対策の関係の難しさを考える上で参考になる。「やりたいこと」や「自己実現」を重視する進路指導を批判的に検討する乾・苅谷の議論は、フリーターの非合理化に対して意識的であり、彼らの提案する政策は説得的で現実的であるように思われる。しかし前述したよ

うに、そうした政策も結果としてフリーターの非合理化につながる事が予想されるのである。

「やりたいこと」という論理の「意図せざる帰結」にはまり込むフリーター（久木元 [2003]）、「やりたいこと」にこだわって「大人の職業社会の事実」を知ろうとしないフリーター（小杉 [2001]）、「無理に『夢』をつくり、語るが」「本当は何も考えていない」フリーター（長須 [2001]）などは、「非合理的な夢見る愚か者」とでも呼べるようなフリーター像を提示している。つまり、フリーター析出の構造的な問題を知り問題を個人化してしまうことに危機感を持つ論者においてすら、フリーターの非合理化につながりかねない発想が見られるのである。例えば、三宅 [2003] には正社員への誘いを断ったフリーターが「自己中心的」と批判される事例が紹介されており、一般的にフリーターの判断は非合理化されやすいことが伺われる<sup>39</sup>。

このように「やりたいこと」言説は「やりたいこと」が実現していると考えている大卒新入社員から「やりたいこと」が分からないと語るフリーターまでを主体化していること、そして「やりたいこと」に主体化された若者のエネルギーや時間、就業行動が労働市場を通じて結果として雇用者に都合のいいように使われる構造になっていること、また研究者の論文なども言説構造の一端を担っており、フリーターの非合理化につながりかねない発想が見られることが分かる。

## おわりに

以上、若年者雇用をめぐる語られる「やりたいこと」「好きなこと」「したいこと」などの総体を「やりたいこと」言説と名付け、フリーターの「やりたいこと」志向に限定されがちな研究者の論考を検討することで、その構造を示してきた。

本稿で中心的に論じたフリーターの「やりたいこと」志向に関する論考は2001年から2003年にわたって書かれたものである。その間、若年者雇用問題への関心は高まり、政府も2003年6月に「若者自立・挑戦プラン」を取りまとめるなどその対策に乗り出している。こうしたなかで「やりたいこと」言説は変化したのだろうか。

例えば、(社)部落解放・人権研究所編 [2005] はこれまでフォローされていなかった層のフリーターを問題化し、フリーター研究が深まっていることを示したものである。「大卒で定職に就こうとしない、自分探しや新しい生き方を模索する若者たちは登場しない」(iii)とする本書にも、フリーターの職業観・労働観が「やりたいこと」に関する語りに基づいて分析され、キャリア教育の充実が提言される箇所がある (pp.130-134)。このことは若年者雇用問題と「やりたいこと」という言葉の結びつきの強さを示している。こうした結びつきの強さはなぜ起こるのか、その結果どういったことが起こるのかについて今後も考察していきたい。

## 注

- 1 「フリーター」にカギ括弧をつけたのは、フリーターという言葉がまだ使われ方と定義において議論の余地があるからである。例えば朝日新聞2004年12月25日付にフリーターを自称する67歳の男性が「声」を寄せている。この男性の他にも、行政の定義はもちろん「フリーター＝若者」という一般的通念にも当てはまらない「自称」フリーターが新聞に登場することがしばしばある。本格的なフリーター研究の嚆矢となった日本労働研究機構 [2000] も、年齢の上限を設けていたとはいえ「自称」フリーターへのヒアリング調査に基づいたものである。こうしたことは、労働市場における実態と労働者の自己認識、それを表象する論文やマスコミなどの言説空間、そしてこの両者を結ぶ「自称」「他称」という行為の関係へのさらなる分析の必要性を示唆している。しかしここでは「フリーター＝若者」と限定し、以後カギ括弧を外して記述していく。
- 2 具体的にどういったものがあるのかについては後述する。
- 3 あとで詳述するが、この場合の「非合理化」とは、フリーターを「やりたいこと」にこだわる理解のできない存在として扱うようになることであり、そのことでフリーターがその個々の経験から得た「合理性」について軽視する視点が生まれることである。それによってフリーターの政策的・社会的排除につながる可能性がある。
- 4 リクルート ([2004], p.91) によると、「エントリーシートとは、自己PRや志望動機に関連する質問項目のある、正式な企業への提出書類 (応募書類) のことを指す。」
- 5 「近代の産業社会の進展は、デュルケーム、ジンメル、テンニースらが定式化したように、大量分業社会の発達を意味する。技術・産業次元の専門分化と大量化は、社会関係における役割分化と、役割関係の画一化に連動する。」(栗原 [1981], p.49)

- 6 菅山 [2000] によると、大正期に開始された「日本の少年職業紹介は、単なる労働市場政策ではなく、青少年問題・都市問題に対する対策」であり、そうした伝統は戦後の職業紹介制度にも影響を与えたという (pp.214-218)。菊谷 [1991] も昭和初年から日本の進路指導の基本理念(「生徒の個性を重視しつつ、能力・適性に応じて彼らの主体的な進路選択を援助する」)は基本的に変わっていないと述べている (p.96)。また広田 [2001] は昭和初年の職業指導言説中の「個性」を検討し、「個性」がマクロ的な問題を個人に還元するキーワードになっていたことを論じている (pp.94-127)。これらが北村のいう「近代的な青年という枠組み」の揺らぎとどれほど関係があるのかは検討し切れていない。
- 7 例えば小杉編 [2002]、小杉 [2003]、管見の限りでは、雑誌媒体に見られる「フリーアルバイター」の最も古い使用例はマガジンハウス ([1986], pp.38-39) である。ちなみに「アルバイター」という言葉は、学生援護会 [1980] ですで見られる。
- 8 例えば朝日新聞 [1990a]、ここでは『「自分さえよければ」『どうにかなるさ』の甘え意識』のほかに「自分の本当にやりたい仕事をしているのか」という問いへのフリーターの曖昧な回答も批判され、「もっと本人の個性を尊重した進路指導が行われるべき」ということが主張されている。
- 9 朝日新聞 [1990b] は朝日新聞 [1990a] への反論であり、「労働をメシの種と割りきって、商品と割りきって、必要最低限の労働力を買って買って、後は、自己実現のために使いたいと思うことが、なぜいけないのか。」と述べ、フリーターは新しい生き方を模索しているのではないかと論じている。
- 10 おおよそであって厳密な分類ではない。また同じ分類に入っている論者どうして横のつながりが必ずしもあるわけではない。重複する部分などについてはその都度説明する。
- 11 ちなみに堀 [2002] は「学校的」価値観にコミットしなくなった「パートタイム高校生」について論じていて参考になる。
- 12 下村 [2002] の指摘するフリーターの語る「やりたいことがあるフリーターは良いフリーター。ないフリーターは悪いフリーター」という語りからは、フリーターの中にある「労働を通じた自己実現」願望、ある種の勤労倫理を読み取ることができる。
- 13 上野は「そう言っておけば聞いた方が安心するからで、これは調査者の側が手段的価値という近代的価値を信じているから、彼らの発言をそれ以上疑わないだけです。」([2001], p.196) と述べ、フリーターの「やりたいこと」志向の存在を否定している。
- 14 下村は「やりたいこと」志向はフリーター独特であると述べているが「はじめに」でも触れたように溝上 [2004] はいわば大学生の「やりたいこと」志向を分析している。また就職活動において大学生は企業側から「やりたいこと」探しを求められている。
- 15 日本労働研究機構 ([2000], p.84)
- 16 下村 [2002], pp.83-84
- 17 例えば、富田 [2001]
- 18 日本労働研究機構 ([2000], p.27)
- 19 確かに「やりたいこと」の効果に「他人からの放置」という問題もあるが、これは他の論者が指摘している問題の個人化と同じことだと考えられる。
- 20 金井 [2003]
- 21 ちなみに安達 [2004] によると、少なくとも大学生に関しては「やりたいこと」志向と職業未決定との間に関係は見られないという。
- 22 久木元 [2003] の以下の指摘は重要である。「フリーターであることよりもあえて正社員になることの方が、自明ではなく理由が必要とされると上述したが、正社員になった場合に経験することになる困難な状況が先取りされて折込済みであるからこそ、正社員になる選択の方が説明を要するものとされるのだと考えられる。」(p.85)
- 23 学研 [2001] に載っているフリーターの例。会社を1ヶ月で退社後、パートナーに興味を持ち努力してパーの正社員として採用された人、アルバイトを転々とした後に兄弟でIT系のベンチャーを立ち上げテレビにも取り上げられた人、家具の組み立てをしながら映画作りに励んでいる人、父親の借金を返済するためにバイト漬けの人、漫画家志望だったが断念し現在はコミック誌の編集業務に携わる人など。
- 24 村上 [2003] もここに含まれるだろう。
- 25 例えば「自分の志向、夢や目標、適性、価値観、人生観。そこから「本当にやりたいこと」を見つけ、それが実現できる場や仕事を探していくのが就職活動。」(リクルート [2003], p.50)。他には中谷 [2002a] [2002b]、杉村 [2002] などを見よ。
- 26 小沢・中島 [2004]
- 27 山田 [2002] はバブル期のフリーターと現在のフリーターとは違うと述べている。確かに変化はあったと言えるが、山田のように大卒を前提にそう考えているのは変化の複雑さを見落とすであろう。
- 28 山田 [2004] は、自分の「能力」に比べて過大な「夢」を持っている人をクールダウンさせて職業に就かせるために「職業カウンセリング」のシステム化を提案している。「能力」と「夢」のギャップに階層差が影響しているのだとしたら、これは階層という問題の個人化と隠蔽につながるだろう。例えば小沢・中島 [2004]
- 29 例えば佐々木 [2004]
- 30 渋谷 [2003] の提起するネオリベリズムとそれが生み出す「主体」の問題は、本稿にも大きく関わる重要な問題であるが、同時に過

大なテーマでもあるため、ここでは論じない。

- 31 新谷 [2004] は「やりたいこと」志向を、情緒的安定を可能にする表出性を求めながら生活手段（道具性）の獲得を求めていることを対外的に示す言葉であると解釈し、フリーターの表出性に配慮しない政策はその有効性を主張できないと述べている。新谷の政策に対する問題意識は参考になるが、フリーターの「やりたいこと」志向のみが分析対象となっている点は従来の研究と変わらない。
- 32 構造的要因を理解すればするほど、フリーターの行動が非合理で未熟に思えてくるという傾向は小杉 [2001] や長須 [2001] らからも伺える。
- 33 久木本 [2003] は「現在の日本社会で、『仕事』や『働く』ということをめくり、言葉の問題が無視できない重要性をもっているということ」に言及し、それがフリーターに限らないことを指摘している。
- 34 (社) 部落解放・人権研究所編 ([2005], pp.152-157)
- 35 『職場の人権』は研究会「職場の人権」が発行している報告書であり、「職場の人権」[2004] には「設立5周年特別企画パネルディスカッション 若者の働き方・生き方を考える」の報告が載っている。パネルディスカッションには正社員5名とフリーター4名がパネラーとして参加し、それぞれの職場の状況などについて語った後、フロアからの質問に答えている。正社員のパネラーはわずか5人であり、これをもとに大卒正社員一般を語ることはもちろんできない。しかしパネラーとして呼ばれた5人は職場も職種も異なり、もしその全員に共通する傾向があるとしたら、そうした傾向が他の大卒正社員にも共通する可能性は高い。
- 36 その理由は長時間労働（パネラーの1人は過労死ラインを過ぎている）や産休が取れそうにないことなどで、パネラー5人中4人がいづれ職場を離れる可能性に言及している。
- 37 「今やりたいことができればいい」(p.37)、「辛いところも含めて仕事を楽しむことができれば幸せじゃないのかな」(p.41)、「やりたくない仕事も一つひとつ確実にしていけないと、自分のしたいこともできないのかな」。「やりたいこと」は人を仕事へと強く動機付け、また「自発的な」創意工夫を引き出す力を持つ。日本経営者団体連盟 [1995] などにも現れているように、こうした正社員の態度は日本企業の経営手法と強く結びついている。
- 38 バウマン [2003] は、消費社会において職業も倫理的ではなく審美的に判断され、「面白い」職業と「退屈」な職業とに分類されるようになったと指摘し、天職は特権となったと述べている。つまり、ここでいう「階層化」とは経済的側面だけではなく、職業の「やりがい」や表象の側面をも含む「階層化」であると考えられる。
- 39 フリーターの判断の非合理化はフリーターという存在自体の非合理化につながりやすく、このことをもっと警戒する必要があるのではないか。

## 参考文献

- 安達智子 [2004] 「大学生のキャリア選択 その心理的背景と支援」『日本労働研究雑誌』No.533, pp.27-37
- 新谷周平 [2004] 「フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能 現在志向・「やりたいこと」志向の再解釈」『社会科学研究』55(2), pp.51-78
- 伊藤大一 [2003] 「ブレア政権による若年雇用政策の展開 若年失業者をめぐる国際的な議論との関連で」『立命館経済学』52(3), pp.190-203
- 乾彰夫 [1997] 「企業社会の再編と教育の競争構造」(渡辺治・後藤道夫編『講座 現代日本3 日本社会の再編成と矛盾』大月書店, pp.265-334)
- 乾彰夫 [2002] 「職業教育・進路指導の充実は「フリーター問題」を解決できるか」『労働の科学』57(2), pp.19-22
- 上野千鶴子 [2001] 「「フリーター」の背後にあるもの」(学研『フリーター なぜ? どうする? フリーター200万人時代がやってきた』学研, pp.186-196)
- 小沢牧子, 中島浩篤 [2004] 『心を商品化する社会 「心のケア」の危うさを問う』洋泉社
- 学生援護会 [1980] 『アルバイト白書』学生援護会
- 学研 [2001] 『フリーター なぜ? どうする? フリーター200万人時代がやってきた』学研
- 金井篤子 [2003] 「キャリア発達の見点から」『現代のエスプリ』427, pp.56-68
- 苅谷剛彦 [1991] 『学校・職業・選抜の社会学 高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出版会
- 苅谷剛彦・菅山真次・石田浩編 [2000] 『学校・職安と労働市場 戦後新規学卒市場の制度化過程』東京大学出版会
- 苅谷剛彦 [2003] 「若者よ、丁稚奉公から始めよう 「自分探し」を夢想する前にまず「手に職」をつけよ」『文芸春秋』81(6), pp.359-365
- 基礎経済科学研究所編 [1992] 『日本型企業社会の構造』労働旬報社
- 北村三子 [1998] 『青年と近代』世織書房
- 木下武男 [1997] 「日本の労使関係の現段階と年功賃金」(渡辺治・後藤道夫編『講座 現代日本3 日本社会の再編成と矛盾』大月書店, pp.125-219)

- 久木元真吾 [2003]「「やりたいこと」という論理 フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』48(2), pp.73-89
- 熊沢誠・立岩真也 [2003]「若者の労働のゆくえ」『GRAPHICATION』No.129, pp.4-11
- 栗原彬 [1981]『やさしさのゆくえ = 現代青年論』筑摩書房
- 玄田有史 [2003]「二〇代、三〇代社員が危ない」『文芸春秋』81(3), pp.332-338
- 小杉礼子 [2001]「フリーターからの「はじめの一歩」」(学研『フリーター なぜ? どうする? フリーター200万人時代がやってきた』学研, pp.206-212)
- 小杉礼子編著 [2002]『自由の代償/フリーター』日本労働研究機構
- 小杉礼子 [2003]『フリーターという生き方』勁草書房
- 佐々木賢 [2004]「労働と教育」『現代思想』32(4), pp.170-184
- 渋谷望・酒井隆史 [2000]「ポストフォードイズムにおける 人間の条件 エートス政治と『第三の道』」『現代思想』28(9), pp.78~91
- 渋谷望 [2003]『魂の労働』青土社
- 下村英雄 [2000]「フリーターの職業意識」(日本労働研究機構『調査研究報告書136 フリーターの意識と実態』日本労働研究機構, pp.70-85)
- 下村英雄 [2002]「フリーターの職業意識とその形成過程 「やりたいこと」志向の虚実」(小杉礼子編『自由の代償/フリーター』日本労働研究機構, pp.75-99)
- 「職場の人権」[2004]『職場の人権』第31号, pp.27-43
- 菅山真次 [2000]「中卒者から高卒者へ 男子学卒労働市場の制度化とその帰結」(苅谷剛彦・菅山真次・石田浩編 [2000]『学校・職安と労働市場 戦後新規学卒市場の制度化過程』東京大学出版会, pp.193-264)
- 杉村太郎 [2002]『絶対内定』ダイヤモンド社
- 富田富士也 [2001]「わが子がフリーターになったら」(学研『フリーター なぜ? どうする? フリーター200万人時代がやってきた』学研, pp.198-205)
- 長須正明 [2001]「フリーターという生き方 若者たちが描くライフスタイル」(学研『フリーター なぜ? どうする?』学研, pp.214-225)
- 中谷彰宏 [2002a]『面接の達人 バイブル版』ダイヤモンド社
- 中谷彰宏 [2002b]『面接の達人 自己分析・エントリーシート編』ダイヤモンド社
- 永野仁編著 [2004]『大学生の就職と採用 学生1,143名、企業658社、若手社員211名、244大学の実証分析』中央経済社
- 永野仁 [2004a]「新規大卒者採用とその成功の条件」(永野仁編著『大学生の就職と採用 学生1,143名、企業658社、若手社員211名、244大学の実証分析』中央経済社, pp.23-48)
- 永野仁 [2004b]「大学生の就職活動とその成功の条件」(永野仁編著『大学生の就職と採用 学生1,143名、企業658社、若手社員211名、244大学の実証分析』中央経済社, pp.91-114)
- 日本経営者団体連盟 [1995]『新時代の「日本的経営」 挑戦すべき方向とその具体策』日本経営者団体連盟
- 日本労働研究機構 [2000]『フリーターの意識と実態 97人へのヒアリング結果より』日本労働研究機構
- ジグムント・パウマン [2003]「労働倫理から消費の美学へ 新たな貧困とアイデンティティのゆくえ」渋谷望訳(山之内靖・酒井直樹編『総力戦体制からグローバリゼーションへ』平凡社, pp.203-234)
- 広田照幸 [2001]『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会
- フリーター研究会 [2001]『フリーターでいいの? フリーターがいいの? フリーターがわかる本』数研出版
- 堀有喜衣 [2002]「高校生とフリーター」(小杉礼子編『自由の代償/フリーター』日本労働研究機構, pp.119-132)
- 溝上慎一 [2004]『現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』日本放送出版協会
- 道下裕史 [2001]『エグゼクティブフリーター』ワニブックス
- 三宅章介 [2003]「企業経営からみたフリーター批判」『現代のエスプリ』427, pp.45-55
- 村上龍 [2003]『13歳のハローワーク』幻冬舎
- 山田昌弘 [2002]「フリーターの置かれている現状と将来展望」『労働の科学』57(2), pp.15-18
- 山田昌弘 [2004]『希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房
- 山之内靖・酒井直樹編 [2003]『総力戦体制からグローバリゼーションへ』平凡社
- 渡辺治・後藤道夫編 [1997]『講座 現代日本3 日本社会の再編成と矛盾』大月書店

【新聞・雑誌】

- 朝日新聞 [1990a]「これでいいのか、若者の就職観(声)」1990年2月21日付朝刊
- 朝日新聞 [1990b]「企業やめてもどうにかなる(声)」1990年2月28日付朝刊

橋口 若年者の雇用問題と「やりたいこと」言説

朝日新聞 [2004] 「あれもやめて、これもやめた(声)」2004年12月25日付朝刊

マガジンハウス [1986] 『ダカーポ』1986年10月5日号

リクルート [2003] 『就職ジャーナル』2003年5月号

リクルート [2004] 『就職ジャーナル』2004年3月号

# The youth unemployment problem in Japan and “the discourse of YARITAIKOTO”

HASHIGUCHI Shoji

## Abstract:

In this essay we analyze “the discourse of YARITAIKOTO [what one hopes to do],” through rethinking the previous academic works about young part-time workers’ orientations toward “YARITAIKOTO.” “The discourse of YARITAIKOTO” to examine in this essay does not include all of such discourses, but only that related to the discussion of the youth unemployment problem.

Not only young part-time workers but university students refer to what they hope to do. This means that they make “the discourse of YARITAIKOTO.” However, previous academic works analyze only young part-time workers’ such discourses and their orientation to do what they hope to do. This orientation is called “YARITAIKOTO orientation” in those works. The purpose of this essay is to analyze what such previous works bring and to show the structure of “the discourse of YARITAIKOTO,” including scholars’ discourses of “YARITAIKOTO.”

“YARITAIKOTO” makes young people subjects. But at the same time, they become subjects of the modern labor market. As its result, they are exploited by companies. The previous academic works about young part-time workers’ “YARITAIKOTO orientation” help this process of subjectification and exploitation, while those works were intended to help the young people.

Key words : Youth unemployment, Freeter, University graduates, Yaritaikoto, Discourse